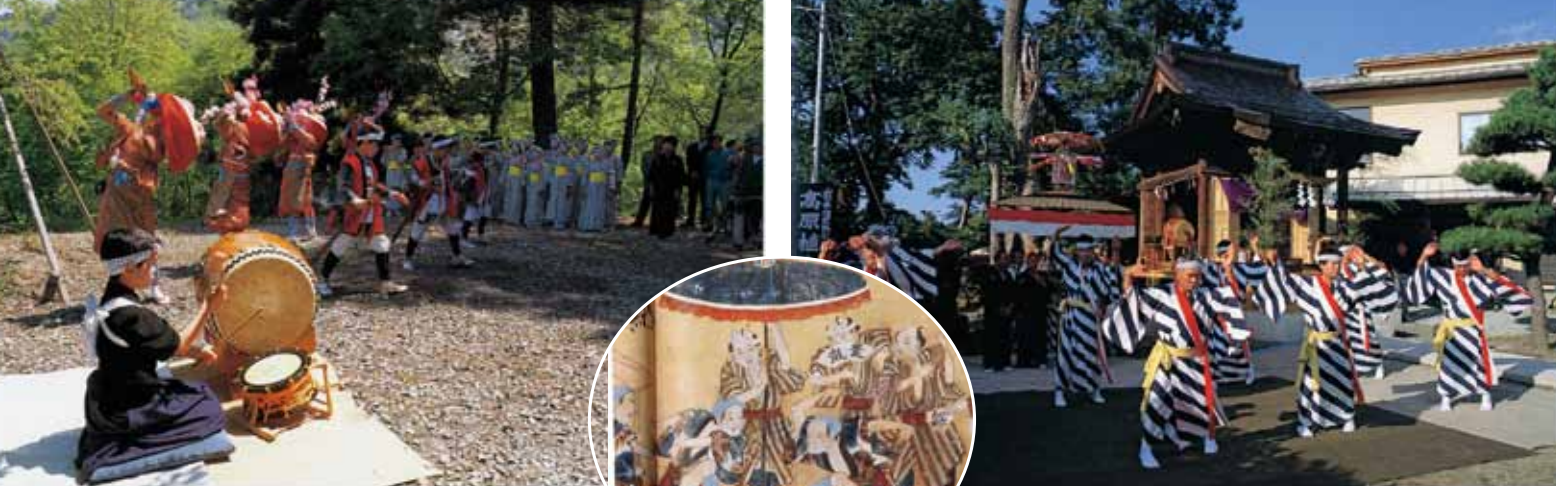




田植踊り(山家)

高原植木踊り



松尾バヤシ



大黒舞



小正月行事 ゆわゆわ 市民写真作品

4 地域に伝わる文化の継承と創造

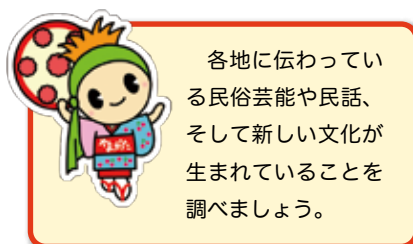
多彩な民俗芸能

山形市周辺の農村集落にかかわる民俗芸能である田植踊り、大黒舞、願人踊り、シシ踊りなどは、昔から親から子、孫へと代々引き継がれています。

田植踊りは、山家・成沢・沼木・榎沢・若木・沖ノ原・飯田・谷柏などで行われており、田植えの無事終了と豊作を祈る踊りです。山家田植踊りは、大人と子供踊りがあり、入虚空蔵堂の祭礼に奉納され、鈴川地区の子どもが引き継いでいます。

大黒舞は、商売繁盛と作神の踊りで、飯塚・休石・山家・桜田、宮浦小学校でも踊っています。

願人踊りは、高原町と蔵王半郷松尾にあります。高原植木踊りは、県指定無形民俗文化財に指定されており、植木踊りの名称は旧植木村の名を引き継いでいます。共に踊りの中央には小傘のついたマンド（大傘）を立てます。これは神霊を呼び踊り場を清め、踊り手を護ると言われています。



各地に伝わっている民俗芸能や民話、そして新しい文化が生まれていることを調べましょう。



山形オペラ協会の公演



第20回 童謡の日コンサート



山形まるごとマラソン

また、小正月に行われるゆわゆわや鳥追いの年中行事も貴重な地域文化です。

芽をふく新しい文化

山形には、新しい文化活動が次々と生まれ育っています。音楽や美術、演劇、文芸、写真、舞踊、茶道、華道、詩吟、地域づくりなどです。

多くの団体と個人は、市民会館や山形テルサ、やまぎんホール、文翔館、公民館、コミュニティセンター、芸文ひろばなどのホールを活用して、公演や発表会をおこない芸術文化の向上に寄与しています。

山形に根付く綴り方（作文）での「書く力」や合唱・絵画等での文化的な「創る力」を培う風土と教育の賜なのでしょう。また、2013(平成25)年から始まった「山形まるごとマラソン」も、新しいスポーツ文化として根付くことが期待されます。

ミニ知識 32

音楽が盛んな街・山形

小学校の各教室から毎朝元気で爽やかな歌声が聞こえ、中学校の合唱コンクールでは素敵なハーモニーが響き渡ります。

プロのオーケストラ演奏を小学生から幾度と聴ける機会をいただけるのは、山形交響楽団創設者村川千秋氏と関係者のおかげです。

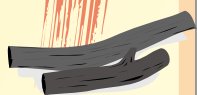
山形は、学校での音楽が盛んなだけでなく、大人の合唱団や吹奏楽団、管弦楽団などの数多くの団体あり、若い人から高齢まで揃って皆が演奏を楽しんでいます。文化が薫る秋のコンサートホールは、演奏者と聴衆で連日賑わいます。

また、オペラや童謡のコンサートなども、長年仲間が手を取り合い、音楽の愉しさを素晴らしさを広めています。山形が音楽の街として元気なのは、次の4点が考えられます。

- ①小中学校の時から美しい歌声や合奏を響かせ、合唱コンクール全国大会等で高校全国一になった東高と西高の実績の継承
- ②山形北高音楽科と山形大学音楽科等での、確かできめ細やかな指導と各団体での優れた指導者陣
- ③地域に根ざした山形交響楽団の演奏活動や音楽教育連盟、山形オペラ協会等の積極的な活動とその支援の充実
- ④行政や市民の音楽に対する理解ある支援と温かな協力連携

音楽は世界の共通語であり、国境はありません。心の安らぎと世界の平和を、生きる活力を与えてくれるのは、音楽の力なのです。

炭焼藤太



むかし、京都の豊玉姫というお姫さまが、清水寺の観音さまに願をかけると、みちのくの山形に炭焼藤太という男がいるから、さがしだして妻になるようにというおつげがあった。

姫は長い旅をつづけて山形につき、どうやら藤太をたずねあてることができた。

藤太は、蔵王山の北のふもとに、今にも倒れそうなり小屋を建てて住み、そこらしばらく山に入ったところにある炭焼き小屋へ通って、炭を焼いているのであった。

かみもひげものびほうだい、着ている着物はぼろぼろで、姫はおどろいたが、観音さまのおつげであるからと思いなおし、藤太の妻になって藤太といっしょにくらすことになった。

「山形の町へ行って、米や、着物を買ってきてください。」と言った。

藤太は、わたされた黄金をふところへ入れて、山を下りた。

山形の町はずれ国分寺薬師堂まで来てひと休みすると、境内の鴻の池に、たくさん水鳥がうかんで泳ぎ

回っていた。

一つつかまえてやろうと思った藤太は、あたりを見回したが手ごろな石がみつからなかったので、ふところの黄金を一まいとって水鳥めがけて投げた。

黄金は、水鳥まではとどかず、池のまん中あたりへしずんでしまった。「こんどこそ!」

と、つぎつぎと投げた黄金は、水鳥の上をどびこえて向こうの岸の近くへ落ちた。

藤太のふところには一まいも黄金は残らないので、何一つ買わず家へもどった。

それを聞いた姫は、おどろいて、「あれは黄金というところのものです。あれさえあれば、どんなものでも買えます。もったいないことをなさいました。」

という、藤太は「あれがそんなにとういものか。あんなものなら、おれの炭小屋のまわりに、いくらでもごろごろしている。」

と答えて、炭小屋のほうを指さした。

藤太の案内で、姫は炭小屋へいってみておどろいた。

炭小屋のまわりにごろごろしている石ころが、どれもこれもびかびか光っているではないか。

次の日から、藤太は小屋のまわり

の黄金を持って、山形の町に出て、米や着物ととりかえるようになった。黄金は取っても取ってもなくなることもなかったから、たちまち大金持ちになり、炭焼長者とよばれるようになったという。

炭焼藤太と豊玉姫の間には、吉次、吉内、吉六の三人の男の子が生まれた。大きくなって、三人とも都へ行って、たくさん黄金を朝廷にさしあげた。

なかでも、長男の吉次は、ときどき山形と京都の間をゆききし、金売り吉次という名で、ひろく知られた人である。

吉次は、藤原秀衡のたのみで、源義経を京都の鞍馬山から奥州平泉まで送りとどけた。

藤太の子三人は、それぞれ大きな商人になって、炭焼きのあとをつぐ人がいなかったので、藤太と姫は清水観音に願をかけて男の子をもうけた。

これには喜藤太という名をつけたが、喜藤太は父のあとをついで炭焼きになった。

山形市の東はずれにある唐松観音は、京都の清水観音の建て方にならって建てられたのだが、豊玉姫がうやまっていた仏像をまつたものだったといわれている。

「山形の伝説」より

あこや姫



むかし、みちのく信夫郡（宮城県）の領主藤原豊充という人に、一人のむすめがいた。

名をあこや姫といい、すがたかたちがいへん美しいうえ、琴の名人であった。

ある夜のこと、姫は、いつものように一人で琴をかなでていると、どこからともなく、姫のひく琴に合わせた笛の音がひびいてきた。

笛の音は、しだいに近づき、笛を手にした若い男が姫の前に立っていた。

「あなたの美しい琴の音色にひかれてまいった。わたしの名は、名取の左衛門太郎……。」と男は言い、にっこりとわらった。

月のすんだ静かな夜であった。姫のかきならす琴の音と、男の笛は調べを合せてどこまでもひびいた。草も木も、耳をそばだてて聞き入っているようであった。

それからは、夜ごと男があらわれ、姫のひく琴に合せて笛をふくようになり、やがて左衛門太郎とあこや姫は、愛し合うようになった。

それからどれだけたったころか、ある夜、男は力ない声で、

「わたしは、じつは出羽国（山形県）千歳山のいただきに根をはる老松である。ゆえあって、ここへ来るのも今夜かぎり。もう二度と会うこ

ともかなうまい……。」

といって、さびしげに暗やみにすがたを消した。

姫はたいへん悲しんだがどうすることもできなかった。日ごとひいていた琴を手にもすることもなく、打ちおれた日を送っていた。

おりしも、名取川の大橋が、何日もつづいた大雨で流され、人びとの苦しみはかぎりがなかった。橋げたに使う、ちょうどよい大木がみつからず、手のほどこしようななかったからである。

あたりの村長たちが集まって相談し、神主にうらなってもらったところ「これはよいなことではない。出羽国千歳山のいただきにそびえる大木の老松をもってするしかあるまい。そのほかの木を使ったのでは、たとえかけかえができたにしても、またたちまち流されてしまうであろう」ということであった。

村長たちは、おおぜいの木こりを集めて、千歳山へ向かわせた。国さかいの峠をこえて千歳山についた木こりたちは、何日もかかって老松を切りたおした。

ところが、いざ名取川の岸辺まで運ぼうとしたとき、はたどこまてしまった。

マツの大木は、いくらおおぜいの人が力を合わせても、びくともしないのであった。

ふたたびうらなってもらったところ「信夫の藤原の館のあこや姫に、

手にかけてもらえば、ように動くはず」ということであった。

村人にたのみこまれたあこや姫は、旅のしたくをととのえて、館を出た。峠をこえて千歳山についたあこや姫は、切りたおされた老松と対面した。

「なんとというおすがた……左衛門様……。」

あまりのかわりように、姫はマツにとりすがってなきふした。

すると、ふしぎなことに、マツはするすると動きだし、なんなく名取の川岸まで運ばれていったのである。姫はいったん信夫に引き返したが、すぐにしたくをしなおして千歳山にもどった。老松の霊をなぐさめることを心にきめてのことであった。

あこや姫は、老松の切られたあとに、「あこやのマツ」を植え、いおりをむすんで万松寺と名づけ、ながくほだいをとむらった。

姫の植えたマツは、えだをのぼし、葉をひろげ、実を散らして、やがて山全体にひろがり、今の世にも、みごとな緑を見せている。

山形市と宮城県を結ぶもっとも近い道が笹谷峠であるが、千歳山に向かったあこや姫が、老松の霊とささやき合ったところなので、「ささやき峠」とよぶようになり、のちに「笹谷峠」になったのだといわれている。

「山形の伝説」より

水の種



むかしむかしのことだ。

柏倉村に与左エ門という人はいった。たど。ありったけの田んぼが干あがって、みな困っていた年のことだ。

町に春まき種子買いに、ちようど橋のたもとまできたら、野郎こべら（子どもたち）が白いへびを棒でたたいたり、いじめただけだ。

「これこれ、白いへびあ、神さまの使いものだぞ。殺したりすつど、たたられつぞ。ほらほら、銭けつから、おれにそのへび売ればあ。」

与左エ門はありったけの銭を野郎こべらにくれてやって、へびをふところに入れて、家にもどった。

「種子買ってきたか。」

「いやいや、とんだご（とんでもないところ）にぶつつかって、白へび一匹買ってきたことだ。」

と、ふところから出した。

「そいつはええごした。」

その夜のことで。与左エ門もかが（おくさん）も同じ夢見た。箱根権現様に『水の種』がある。それをもらってきてまぐど、沼ができ、川ができて、村の水不足はなくなるという神さまのおつげだった。

「お前も見たか。そんじゃまず、その水の種を受けてへるべ。」

与左エ門はさっそく出かけた。夜も昼もなく走り続けて山越えして行ったら、大きな川の前に出た。

「こりゃ困った。こげに（こんなに）急な流れではわたらんね。」と黙っていたら、そこに橋があった。

「こんなどこに橋があったかな。」と思っただが、いそぐもんだから、橋をわたり、ようやく箱根権現に着いたら、神前にひょうたんに入った水の種があった。

与左エ門はひょうたんを腰にくくりつけると、また、ひた走りに走ってもどった。大川にかかった橋をわたって、

「もうひと息だ。」と黙って、足をとめたら、今までかかっていた橋がもうきえてしまっているのだ。

「あっ、あのへびのめぐみだ。」

与左エ門はまた走りに走って、村の見える山道に入ったところで、急に気がゆるんで、一服すつかと、腰をおろしたとたん、つかれがでて、ひょうたんを枕にして、ねこんでしまった。

身動きするたんび、ひょうたんの口がゆるんで、水の種がペロツと（すつかり）こぼれて、はっと思っただけで目をさましたときには、ひょうたんの中に一つぶの水の種も残っていないのだ。

朝日が顔出して、村に光があたったのを見たら、あっちこっちに沼ができてしまっていたもので、与左エ門が、

「一つ、二つ、三つ。」と数えてみたら、なんと、いろは四十八もの、大きいのも、小っちゃいのも、あちこちに沼が見えるんだ。

荒沼、コケ沼、ドジョウ沼、ジュンサイ沼など、白鷹山のふもとにできたもので、白鷹四十八沼というんだ。

その中でも一番大きな沼が、畑谷の大沼だ。それからは村に水不足はなくなったんだぞうだ。

とーびんと。

「おっかなくておがしくてむじき話」より